

[年度] 27年度和歌山県農林水産試験研究成果情報

[成果情報名] タカナの多収生産技術の開発

[担当機関名] 農業試験場 環境部

[連絡先] 0736-64-2300

[専門分野] 野菜

[分類] 普及

[背景・ねらい]

和歌山県で郷土料理「めはりずし」の材料に用いられるタカナは、主に水稲の裏作として東牟婁地域で栽培されてきました。近年は、西牟婁地域でも栽培が始まりましたが、栽培方法が確立されていないため収量は少なくなっています。そこで、密植での株取り収穫において、栽培方法の改善による安定した収量確保を目指し、施肥量とマルチ栽培を検討しました。

[研究の成果]

1. タカナは施肥量の増加に伴い収穫時の株は大きくなりますが（図1）、施肥窒素量45kgと60kgで生育に有意な差はなく、60kgで窒素利用効率は低くなります（表1）。
2. 黒マルチを敷設することで、除草作業が省け、雑草との養分競合を防ぎ、タカナが大きく育ちます（表2、図2）。
3. 緩効性肥料を用いた試験では、肥料の種類により収量に有意な差はありません（表3）。



図1 施肥量の違いがタカナの生育に及ぼす影響

表1 施肥量がタカナの収量に及ぼす影響

施肥量 (kg/10a)	*株重 (kg)	**施肥窒素 利用率(%)
①窒素30	2.21 b	76.2 a
②窒素45	2.58 a	75.2 a
③窒素60	2.66 a	42.5 b

*株重は各試験区30株の平均値

**施肥窒素利用率＝各試験区の乾物重×窒素含有率÷窒素施肥量

注) Tukey法において5%水準で異符号間に有意差有り

3.6株/m²、平成26年9月29日定植、12月15日株どり収量調査

於：農業試験場

表2 マルチの有無が収量に与える影響

試験区	株重(kg)	収量(t/10a)
マルチ無し	0.82	3.0
マルチ有り	1.89	6.9

注)平成26年度現地試験 田辺市本宮町



図2 マルチ現地栽培試験
(平成26年度 田辺市本宮町)

表3 異なる緩効性肥料がタカナの収量に及ぼす影響

試験区	株重(g)	収量(t/10a)
①CDU	1,980 a	7.26
②IB	2,118 a	7.76
③ロング	2,141 a	7.85
④ユートップ	2,201 a	8.07

注) Tukey法において有意差なし

注) ①CDUはCDUタマゴ(12-7.5-1.2)、②IBはIBS562(15-16-12)、
③ロングはエコロング413(14-11-13、70日タイプ)、④ユートップ(18-8-10)
窒素施肥量は45kg/10a、マルチ敷設、基肥全量施肥、株間40cm、3.6株/m²

[成果のポイントと活用]

1. タカナの株どり収穫では、施肥量を慣行1.5倍(窒素量45kg/10a)とし、マルチ栽培で密植(株間40cm、条間40cm、千鳥植植え3.6株/m²)にすることにより、多収生産が可能です。
2. マルチ栽培に加え、更に緩効性肥料による基肥1回施肥にすると、省力的な栽培になります。

[その他]

研究課題名：タカナの多収生産技術の開発

予算区分：県単(農林水産業競争力アップ技術開発事業) 研究期間：平成25～27年

研究担当者：林恭平、松下修門、三宅英伸、岡田武彦、林恭弘

発表論文等：マニュアルの発行

ホームページ掲載の可否：可